

【曲目解説】

ベートーフェン（1770・12・16～1827・3・26）は、1811年、皇帝フランツ1世から、ブダペストのドイツ劇場の柿落とし用として劇の付随音楽を依頼されます。当時の人気作家コツェブーの台本による祝典劇「シュテファン王」と「アテネの廃墟」の二つの劇です。ベートーフェンは、湯治先のテンプルリッツで8月末から作曲に着手し、9月上旬に完成（かなりの速筆です）、9月13日には両劇全19曲のスコアをブダペストに送っています。初演は、翌1812年2月9日、ドイツ劇場で行われました。「アテネの廃墟」は、トルコに征服されて廃墟となったアテネを王が救うという物語で、最後はハンガリー王であるフランツ1世が称えられます。序曲と8曲の付帯音楽の中では、第4曲目の「トルコ行進曲」が特に有名です。序曲は、廃墟に喘ぐ人々を暗示する暗い楽句で始まりますが、次第に明るさを見出し、主部では畳み掛けるような主題で力強い曲調となります。

モーツァルト（1756・1・27～1791・12・5）のピアノ協奏曲は、傑作ぞろいです。27曲という数は、他の作曲家と比べても冴抜けています。その各曲は、雰囲気も結構も個性的です。作曲家がどの分野に優れているか、簡単に言えるものではありませんが、モーツァルトの場合、ピアノ協奏曲というジャンルは、彼の資質によく合っていたとは言えるのではないのでしょうか。独奏ピアノと管弦楽、特に木管楽器との会話は、様々な話題を繰り広げ、モーツァルトならではの世界を見せてくれます。本日演奏する第23番は、その傑作ぞろいのピアノ協奏曲の中でも、人気の高い1曲です。特に第2楽章の哀調は、多くの人々の心をとらえます。作曲は1786年、この年には、第24番ハ短調（傑作中の傑作！）、第25番ハ長調のピアノ協奏曲も書かれています。さらに歌劇「フィガロの結婚」、交響曲第38番「プラハ」も作曲され、この1786年は、モーツァルトにとって、一つのハイポイントと言えるでしょう。そうした円熟の筆致は、この曲の随所に伺われます。

ホアン・クリソストモ・アリアーガ・イ・バルソーラ（1806・1・27～1826・1・17）は、スペインのビルバオで生まれました。バスク人と伝えられます。13歳でオペラの作曲という早熟、そして夭折、さらに誕生日が同じこと（ちょうど50年後）から、「スペインのモーツァルト」と称されています。音楽教育は、父親と兄から施され（父親は、彼を神童に仕立て上げようとしたようです）、1821年からパリ音楽院に留学、ヴァイオリンをピエール・バイヨに、対位法と和声をフランソワ・フェティスに師事します。大変な優等生であったため、1824年から、同音楽院の助教授に任命されています。なんと18歳です。しかし、将来を囑望された天才は、20歳になる直前に、そのパリで亡くなります。死因は未だに判然としていません。肺疾患とも慢性疲労に伴う衰弱・消耗とも言われます。いずれにせよ、その早過ぎる死は、惜しんで余りあるものでしょう。今日に伝わる作品の数は多くありません。歌劇「幸福な奴隷」、1曲のミサなどがありますが、特に三つの弦楽四重奏曲は、しばしば演奏されるようになりました。本日演奏する「交響曲」は、ニ長調の堂々とした和音で始まる序奏を持ちますが、雰囲気は次第に暗く、また神秘的な様相を見せ、ニ短調の主部へと流れ込みます。その情熱的な第1楽章に続き、温かい雰囲気第2楽章、どこか鄙びた味わいのあるメヌエット、そして大団円、あまりにも速く生涯を駆け抜けていった青年の肖像画のような名作と言えるでしょう。